

博士学位論文審査要旨

2017年6月22日

論文題目： 平安期物語における継子譚受容
—孝子説話型の継子譚との比較を中心として—

学位申請者： 森 あかね

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 岩坪健

副査： 文学研究科 教授 廣田收

副査： 文化情報学研究科 教授 福田智子

要 旨：

本論文は、平安期物語における継子譚の受容について、今まで取り上げられることのなかった孝子説話型の継子譚を導入して比較することにより、物語の方法を新たな視点から考察しようとして試みた、意欲的な論考である。

継子譚とは世界的にみられる話型で、その代表例はグリムの「灰かぶり」、いわゆる「シンデレラ」である。従来は平安期の物語に取り入れられた継子譚を「シンデレラ」型と比較して、重ならない部分は変型と見なされてきた。しかしながら、インド・中国から伝わった継子譚と一致することを本論文では指摘した。大陸伝来の継子譚は孝子説話の一種であり、継娘ではなく継息子である点が特徴である。

本論文は第一部二章、第二部三章、第三部三章、それに序章と終章、参考文献を加えた構成から成る。第一部「物語表現としての継子いじめ」では、平安期物語に見られる継子いじめの共通認識と、大陸伝来の継子譚との関係について論じた。当時の通い婚では継子を引き取ることが稀であるにもかかわらず、大陸伝来の継子譚が知識層で受容され、それが物語に反映されたことを明らかにした。第二部「短編から長編物語へ」では、大陸伝来の短編の継子譚が素材として平安期物語に組み込まれ、長編物語に至る変化を追究した。第三部「『源氏物語』と継子譚」では、第一・二部を受け、継子譚の変型として論じられてきた『源氏物語』を、大陸伝来の継子譚と比較して、継息子の物語として捉え直した。

本論文では、平安期物語に見られる継子譚は「シンデレラ」型のみならず、大陸伝来の孝子説話型の継子譚も取り入れられ、物語全体に機能していることを解明した。このような分析は、新たな研究の領野を拓いた独創的な試みであると評価できる。

よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2017年6月22日

論文題目： 平安期物語における継子譚受容
—孝子説話型の継子譚との比較を中心として—

学位申請者： 森 あかね

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 岩坪健

副査： 文学研究科 教授 廣田收

副査： 文化情報学研究科 教授 福田智子

要 旨：

上記審査委員3名は、2017年6月17日、午後1時から約2時間にわたり、徳照館2階の第1共同利用室において、公開で学位申請者に対して口頭試問を行なった。

学位申請者は、審査員からの質疑に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の事柄に関しても、的確かつ詳細な応答を行なった。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学力水準の高さが確認された。

また、語学（英語）についても、十分な理解力と運用能力、および表現力があることが認められた。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 平安期物語における継子譚受容
—孝子説話型の継子譚との比較を中心として—
氏名： 森 あかね

要旨：

継子譚は世界的に見られる話型であり、その歴史は長い。代表的な話として真っ先に挙げられるのは、グリムの「灰かぶり」、所謂「シンデレラ」である。日本における現存の最も古い継子譚の組み込み例は、平安期の『落窪物語』、『うつほ物語』といった物語であり、この他にも多数の散逸した継子物語が存在し、一種の流行となっていたことが推察できる。それ故に、平安期物語における継子譚受容は、一つの研究視点として、その成果が積み重ねられてきた。これらの先行研究では、継子譚を日本古来の型として捉え、貴種流離譚、通過儀礼との関係で論じられてきた。そして、中心となったのは女の継子の話、所謂「シンデレラ」型の継子譚との比較であった。継子譚と言えば「シンデレラ」型を指すという認識も強く、「シンデレラ」型を基本型として据える比較によって、重ならない部分は「変型」として評価される傾向にあった。その中では性別の違いも「変型」として指摘する論も、多数見受けられた。

継子譚分析において、もう一つの視点として大陸伝来の継子譚からの影響が挙げられる。物語が作り出される平安撰関期は、未だに「家」が未発達な段階であり、婚姻形態・養育形態の都合上、継母が継子をいじめるといった問題は表面化しにくいとされる。それ故に、既に「家」が成立し、付随する問題として継子いじめを語った中国・インドの継子譚が日本に伝来することで、物語に作用したとする視点である。実際に大陸から伝来した継子譚は、平安期に編纂された説話集に数多く記録され、注釈書等の記述にも引用されており、人々の間で広く共有されていたことが推測される。その大陸伝来の継子譚は、ほとんどが継子は男の話であり、「シンデレラ」型とは異なっている。日本の作品においても、これまで「変型」と評価されることが多かったが、男の継子としては、『今昔物語集』「亀報山陰中納言恩語」(巻19第29話)・「陸奥国府官大夫介子語」(巻26第5話)、『うつほ物語』の忠こそ、『源氏物語』の光源氏の例が存在している。継子譚の発生源の問題は別にしても、大陸伝来の継子譚と平安期物語を比較し、表現の問題としての分析は有効ではないだろうか。特に大陸伝来の継子譚の中で注目されるのは、孝を主題として語られる孝子説話の一種である。孝子説話は、漢詩文、和歌等、様々なジャンルに取り込まれ、孝子説話型の継子譚である。古代中国を模倣し、国家統治理念として認識された孝の受容を鑑みても、また現存する孝子説話型の継子譚の用例数から見ても、注目すべきパターンと言える。

そこで本稿は、大陸伝来の継子譚、特に孝子説話型の継子譚との比較を中心として、平安期の物語表現を支える一つの素材としての関わりを検討することを目的とする。『落窪物語』、『うつほ物語』、『源氏物語』と、継子譚が組み込まれた現存する平安期物語を取り上げ、物語の方法を新たな視点から、素材の組み込み方法や、物語への機能を考察する。

第一部「物語表現としての継子いじめ」では、平安期物語に見られる人間関係実態を越えた継子いじめの共通認識と、大陸伝来の継子譚の関係について論じる。第一章「平安期物語における「継子」「継母」「継父」「継女」の使用実態」では、平安期物語に見られる「継子」「継母」「継父」「継女」の用例を分析、分類し、その使用方法について明らかにする。第二章「平安期物語の継子譚展開—孝子説話型の継子譚との関わり—」では、改めて日本の継子譚発生に関する先行研究を整理し、孝子説話が日本で受容されていく様を追いつき、平安期の物語が孝子説話型の継子譚を素材として取り込む道筋を、表現の面から考察する。

第二部「短編から長編物語へ」では、平安期物語において継子譚が素材として受容され、組み込む方法が模索されていく様子を論じ、短編の素材が物語に取り込まれ、長編物語に至る変化を追う。第三章『落窪物語』における孝養—継子いじめとの関わりから—では、『落窪物語』の孝養譚部分を孝子説話型の継子譚との関わりから読み解き、孝が物語に果たす機能を明らかにすることで、新たに物語を位置づける。第四章『落窪物語』北の方における継母造形—継子譚における迫害行為—では、『落窪物語』の北の方の造型を、先行する継子譚における継母の迫害行為と比較し、先行継子譚を越えようとする『落窪物語』の方法を考察する。第五章『うつほ物語』忠こそ物語における長編への方法』では、『うつほ物語』忠こそ物語と、孝子説話型の継子譚である「伯奇」譚との比較を起点とし、その素材の組み込み方法について考察し、長編物語独自の方法を明らかにする。

第三部『源氏物語』と継子譚』では、第一部、第二部を受け、継子譚の「変型」が特徴として論じられてきた『源氏物語』を、新たな視点から再検討する。光源氏と紫の上の物語を対象として、継子譚組み込み方法と機能について考察する。第六章「継息子の物語としての光源氏の物語—弘徽殿女御との関係を中心に—」では継女の物語と比較により検討されてきた光源氏の物語を、大陸伝来の継子譚との比較により継息子の物語として据え直す。その上で、第七章「光源氏の物語と舜譚—孝思想との関わりから—」において、孝子説話型の継子譚の代表例である舜譚との展開比較を通し、孝子説話型の継子譚、孝思想と物語の関係について考察する。第八章「紫の上と明石姫君—馬皇后・肅宗型の関係との比較から—」では、継子譚の枠組みで捉えられてきた、明石の姫君との関係における紫の上の物語を、「馬皇后」故事を中心として、良好な継母子・養母子関係を語る話との比較によって新たに位置づけ、素材の組み込みが果たす機能について探究する。

これらの手順に随って、『源氏物語』に至るまでの平安期物語における継子譚受容の様相を考察した結果、平安期物語における「継子」「継母」等の語句の背景には、人間関係の実態を越えた継子いじめに対する意識が付随しており、大陸伝来の継子譚がその共通認識の形成に寄与することとなり、「シンデレラ」型だけでなく孝子説話型の継子譚も、物語の表現の中に取り入れられ、物語全体に機能していることを明らかにした。

『落窪物語』では、巻四における孝養譚が、孝子説話型の継子譚において主題となる孝によって作り上げられ、一連の継子いじめ物語の決着部分として機能している。その際には元の素材は拡大され、物語に組み込まれている。しかし、その一方で新たな素材を組み合わせることで、先行する継子譚の枠組みを越えようとする試みも見受けられる。継子譚と重なりを見せながらも、それとは異なる素材との接続を果たしている。これは『うつほ物語』における、孝子説話型の継子譚を取り込みつつも、全体を貫く主題によって素材を改変する方法に繋がるものがある。一つの短編素材が大きな流れの中に組み込まれ、長編物語の一部へと成長していく過程を見ることができる。

『源氏物語』と継子譚の関係は「変型」の方法に注目されてきたが、孝子説話型の継子譚、また良好な関係を築く馬皇后・肅宗型の継母子関係という先行する素材の視点を取り入れることで、一つの素材が別の素材と重ねられ、全体を貫く流れの一部として組み込まれていく物語の方法が浮かびあがってくる。幾重にも積み重ねられた層は、読み手の展開予測や期待を裏返し、更なる深層へと誘っていく。ここに長編物語としての『源氏物語』の特徴を見出せるのであるが、先行する物語素材、先行物語における方法の積み重ねによって、この特徴は現れたと言える。元の素材の改変という意味での、所謂「変型」は、『落窪物語』から既に見受けられるのである。そうになると、問題は継子譚の組み込みというより、長編物語構成の問題として捉えられる。三つの物語の分析を通すことで、一つの短編素材が大きな流れの中に組み込まれ、別の素材と繋ぎ合わせ、重ね合わせられながら長編物語へと成長していく過程として見ることができるのである。長編物語としての成長が、継子譚の組み込み方法にも現れているのである。

継子譚は物語表現を支える一側面ではあるが、確かに平安期物語の一部として機能している。この継子譚の分析は、他の時代との接続といった新たな問題へと連鎖する可能性を秘めており、古代文学の表現分析の一端を担うことが期待される。